

一般的に埋木といえ、海や沼などの水没材や土埋木（屋久島）、珪化木などの総称。現在仙台ではその中のひとつ、黒い炭化木材を指すことが多いが、昭和16年に発行された「宮城県の郷土工業」では、埋木細工を「其の材質の相違と発祥年代の相違とがあること」から考へて、便宜上茲では「川埋木」と山埋木とに分類する」として、当時まだ混在していた別種の埋木についても紹介している。ここではその表記にならって仙台埋木（炭化木）を「山埋木」とし、その特徴と制作工程について解説する。

その「埋もれ木」、山？川？

文化

地質 × 文学

「川埋木」は、長期間川底に沈んでいたケヤキなどの木材が、洪水後に沿岸や川床に姿を現わしたものを指す。名取川をはじめ、広瀬川や阿武隈川、北上川などからも採れ、古くは水材とも呼ばれた。やや黄色味を帯びた木肌の特徴で、明治から大正にかけて「神代櫂（じんだいかげ）指物」としても名を馳せ、箆や机などに加工された。杉やナラなどの神代木同様、空気が遮断された状態

山埋木 400万年前に堆積・炭化

四百万年ほど前（新第三紀鮮新世）に地殻変動により土中に埋まった樹木が圧力と地熱で炭化して出来る亜炭の一種で、同じ層から採掘される。土圧で扁平に圧縮された丸太が地下水に浸った状態で堆積するため、材や巨木の外周部分が亜炭に、樹幹部分が埋木になる。ともいわれるが、そう頻繁に出るものではないので、掘り当てる際は、鋳業者であることも多かった当時、埋木加工業者は、掘り出した埋木加工業者を「黒埋木」ということを増強して入手したという。類のほか、カシ類、ハンノキ類、ブナ類などではないかと考えられる。また炭化度の進んだ黒く硬質のものを「黒埋木」、やや軽く加工しやすく茶色っぽいものを「赤埋木」ということもある。

採掘後に乾燥させると大半がひび割れる。焚きつけやすいそれらを亜炭燃料、密度が高く割れないものや比較的均質なかたまりを埋木として扱った。一説には細野に繁茂していたセイコイヤ

樹種の特定は難しい。細胞が完全に変質しており、地域によっては同じ層でも針葉樹や広葉樹などが入り交じるためだ。古代仙台平野に繁茂していたセイコイヤ

土中の埋木を掘り出すのはたいへんな重労働だ。落盤や漏水の危険はもちろんだが、低い坑内温度が原因で神経症を患う坑夫も多かった。ある程度小片になって

商品価値のある亜炭と違つて、埋木は出来れば大きく採りたいが、顔を出した一角の奥にあとどれぐらい埋まっているかわからず、また搬出用のトロックに乗せられる大きさにも限界があるため、現場で一定のサイズで切取り出すことが多かった。

採掘された埋木は日陰で一〜数年乾燥させたのち加工される。ノコギリ、専用盤や漏水の危険はもちろんだが、低い坑内温度が原因で神経症を患う坑夫も多かった。ある程度小片になって

古今和歌集にも登場する歌枕の一つ「名取川」。導かれる語は「埋もれ木」で、古来、歌の世界では表に出せない心情や不遇の境涯を耐え忍ぶ身を詠む語として好んで用いられてきた。しかし実はこの埋もれ木、同じ単語でも、仙台埋木細工として知られる炭化樹木とは、木であるという以外に時代も材質も全くの別物。両者の違いは何なのか。先頃開催された「マチナカアート・亜炭香豆字」の関連イベントで、資料をもとに検証する興味深い発表があった。（文中埋木の表記は統一していない）

「同一視」状況に一石

講演の様子（右端が渡邊慎也氏）

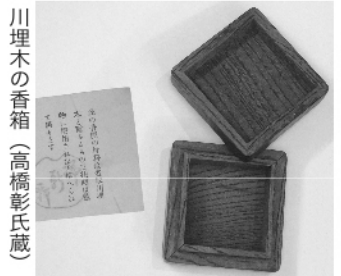


「川埋木」は、長期間川底に沈んでいたケヤキなどの木材が、洪水後に沿岸や川床に姿を現わしたものを指す。名取川をはじめ、広瀬川や阿武隈川、北上川などからも採れ、古くは水材とも呼ばれた。やや黄色味を帯びた木肌の特徴で、明治から大正にかけて「神代櫂（じんだいかげ）指物」としても名を馳せ、箆や机などに加工された。杉やナラなどの神代木同様、空気が遮断された状態

「埋もれ木」または「むもれぎ」は、古く万葉集の歌に登場する。自らの不遇の悲哀や秘めたる恋情を託す語として好んで用いられた。古今和歌集にも、「名取川瀬々の埋木あらはればいかにせむとか あひ見そめけむ」（大意「名取川の瀬々の埋木が水面に現われるように二人の関係が世に知られたらどうするつもりで私達は親しくなつたのだらうか」という歌や、才ある人がなかなか脚光を浴びない時世を「埋木」を用いて愛した表現などが見られる。埋没材自体は仙台以外でも

産するが、陸奥国府が名取川のほとりにあつたこと、そこから採れたものが実際に加工され献納品として京に届けられたことなどから「名取川」が歌枕として組み合わさるようになり、遠く離れた都人の歌心を大いに刺激した。新古今和歌集、新後撰和歌集などに作例が

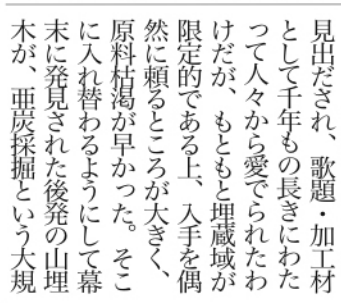
正期までは川埋木が商品として流通していたことがわかる。現在それらを目にする機会はほとんどないが、数少ない現存事例としては、新寺小路阿弥陀寺地蔵堂の延命地蔵菩薩（阿武隈川出土）、旧七北田村の文殊堂内の本尊台座（広瀬川賢淵出土）などが挙げられる。また通常非公開だが、川埋



木で建てられた「埋木書院」という珍しい建築物が松島瑞蔵寺境内にある。

明治41年、八木山の名の由来でもある資産家・四代八木久兵衛氏が南八軒丁に建てた私邸で、戦時中に敷地が強制買収になったため昭和18年に現在地に移築された。十四畳と十畳の座敷があり、天井縁板から床の間その他障子一切が川埋木で作られているという（下八木氏の自著「自然堂記」渡邊慎也氏蔵）を掲載。

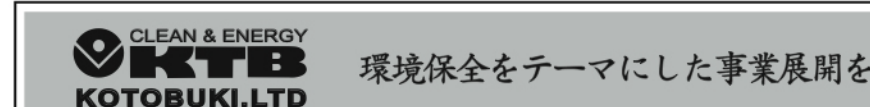
水没後数千年程度経過したとはいえ、四百万年前に埋もれた山埋木より地質学的にははるかに「年下」。そんな川埋木が一旦は先に見出され、歌題・加工材として千年もの長きにわたつて人々から愛でられたわけだが、もともと埋没域が限定的である上、入手を偶然に頼るところが大きく、原料枯渇が早かった。そこに入れ替わるとして幕末に発見された後発の山埋木が、亜炭採掘という大規模な事業を後盾として安定供給されたことが「埋木といえ山埋木」という認識を広め、さらに山埋木商品の販売にあたって川埋木の文学的背景にあやかつたり山も川も区別なく取り扱つたりしたことが同一視を助長したといわれる。しかしその山埋木細工も先細り、千年単位で都との交流を担つた埋木文化はいま、再び歴史の波に埋もれようとしている。



「自然堂記」八木久兵衛著（抜粋）

明治三十二年の頃ならん、曩に北上川洪水の折発見せしという巨材を塩釜に輸送し来ると聞き、行きて之を見るに長さ三丈余直径四尺八寸如何にも巨材なり、然れども外辺腐朽の跡あり人々之を危ぶむ。愚老意を決して之をあがない、試に挽き割らしむるに、一つの節なく櫻の木目鮮明にして光沢あり、実に希代の良材なり。愚老曾て聞く往昔藩祖公開府の頃より北上川に櫻の巨材埋没して其一端水底に顕はれ、濁水の折は往々舟楫に障る事ありしと言ひ伝へ、近世に至るも人之れをしれども時世に憚りて掘採すものなかりしと今や偶然洪水によりて世に顕はれる蓋しその材なるべし依而おもへらく斯る良材は再び世に出づ可くもあらざ、之を細截して小器を作

埋木書院（写真提供/瑞蔵寺）この建物は、改修工事のため平成30年まで見られない



山埋木細工の茶托

硬質炭ゆえ水研ぎは木よりも滑らか。ただ同時に小さな亀裂や凹みも見えだし、キズひとつない面を研ぎ出すのは容易ではない。大量生産品の場合、表は滑らかいのに裏に磨き、裏に残る凹凸についてはノミでギザギザ模様を付けて目立たなくする方法がとられ、仕上げ柄として広く一般化した。

どちらかといえば石に近い素材感だが、最後に漆で仕上げると、再び深く美しい木目が現われる。長い時を経てなお輝く木の個性が山埋木の最大の魅力だ。



環境保全をテーマにした事業展開を行っています。

中小企業経営革新支援法
茨城県知事認定企業

姉妹品 ■ フミライト LB-55 (無公害消臭飼料添加剤)
■ 活水槽「亜炭ちゃん」(フミライト使用)

環境にやさしい瞬間マルチ消臭剤

亜炭の力

あ た ん の ち か ら

● 気になるニオイを速効消臭

天然古代樹木系堆積物の亜炭は、樹木が自分の生育に必要な多くのミネラルを土から吸収し、蓄積していたものです。この亜炭からフミン酸・多種類のミネラルを特許装置で抽出し、濃縮した天然無香料の消臭剤です。

亜炭の吸着力で有機系の物質を吸収し消臭効果が得られます。

● 水で薄めるだけで消臭効果

(1) 亜炭の力を2倍の水で希釈してご使用ください。
* 1本で3ヶ月から6ヶ月使用できます。

(2) 気になるニオイで困っている所に直接、目の細かい噴射器、霧吹き等で撒いて下さい。

亜炭の力 天然無香料・濃縮タイプ 500ml

製造元：KOTBUKI.LTD 総発売元：株式会社エー・シー・エム